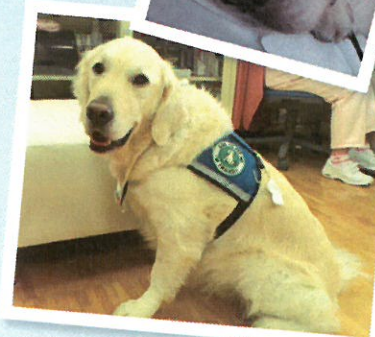




ファシリティドッグのいる病院

～ 神奈川県立こども医療センターのベイリー～



ファシリティドッグって？



「病院にいる犬？セラピー犬でしょ？」いえ、違います。ファシリティドッグとは、「facility=施設」という名の通り、病院に常勤勤務して患者のサポートを行う犬のことです。神奈川県立こども医療センターで働くベイリーの仕事は、入院中の子どもたちと過ごして病気を乗り越えるお手伝いをする。採血、注射、苦い薬……という怖くてつらい治療でも、ベイリーがそばにいれば勇気が湧いてきます。手術室に向かうとき、お散歩のようにベイリーのリードをもち、自然と足取りが軽くなります。子どもたちの不安やストレスが軽減し、治療もスムーズに行うことができるのです。

ベイリーは、常にハンドラーと呼ばれるパートナーと一緒に行動します。ハンドラーには看護師の資格があり、時には患者の治療方針についても一緒に考えます。彼らは立派な医療スタッフなのです。

現在日本で活動するファシリティドッグは、ベイリーと、静岡県立こども病院にいるヨギの二頭のみ。活動の拡大には、大きな二つの壁があります。まずは資金面。活動費は年間で約900万円にも上りますが、現在はそのほとんどをファシリティドッグプログラムを運営するNPO法人「シャイン・オン！キッズ」が負担しています。次に衛生面。ベイリーは予防接種を欠かさず、病棟に入る前には必ず体の消毒をしています。適切な管理をしていれば感染症のリスクは極めて低いのですが、なかなか理解が得られず導入に踏み込めない病院もあります。ファシリティドッグの活動を広げるには、多くの人の理解と協力が必要です。

神奈川県立こども医療センター 血液・再生医療科

横須賀とも子医師から医学生へ



長期で入院している子の場合、本人だけでなく、お父さんお母さんいろいろなことに耐えて頑張っているんですが、褒めてくれる人はなかなかいません。そんなときに病室にベイリーが来てくれると、涙する親御さんもいるんです。私たち医療者もそうですし、ベイリーは病院にいる全ての人を癒してくれます。当たり前のようにいるので、本当にスタッフの一員ですね。

ベイリーと一緒に働くことによって子どもたちへの接し方も変わりました。例えば午後から外来があるときは「早く採血をしてしまわない」と思ってしまっていますが、一方でベイリーは子どものことをじっと待って一緒に処置室に来るし、何をしても怒らないので本当に偉いと思います。自分本位で動くのではなく、「ゆっくり待つこと」は大切だとハッとさせられました。

患者さんと私たちの間にはいろいろなことを担ってくれている人がたくさんいますし、ベイリーもその一人です。そういうことを忘れない医師になってもらえたら嬉しいですね。

ファシリティドッグの活動を行うシャイン・オン！キッズでは、寄付を募集しています。支援につながる写真集も発売中！
<http://sokids.org/ja/>